

植 調

第 1 卷
第 5 号

昭和 42 年
9 月 発行

財団法人 日本植物調節剤研究協会編

目 次

果樹のケミカル・コントロール (農林省園芸試験場・興津支場 大畑徳輔)	1
除草剤の今後の方向(5) (農林省農事試験場 農学博士 荒井正雄)	5
「アジア・太平洋地域雑草防除技術交換会議」 およびハワイの農業と雑草防除について (3) (農林省九州農業試験場 農学博士 野田健児) ···	8
昭和41年度冬作関係除草剤試験成績概要	11
新除草・調節剤	17
植調協会だより	21

除草剤散布にパイプダスター利用についての研究を望む

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 河 田 党

除草剤の普及に伴って除草労力の著しい軽減を見たことは衆知のことである。除草剤散布の労力も、初期主として液剤の用いられた頃には、背負型噴霧機を用いて10アールあたり1～2時間を要したが、小型トラクターに装備された多頭孔噴霧機により、或は除草剤の粒剤化と散粒機の考案に伴って、15分内外に省力されるに至った。

しかし、一方殺虫殺菌剤について見ると、近年パイプダスター式の散布機の発達によって、粉剤散布が著しい能率をあげるようにな

った。2年程前までは、長さ30mのパイプダスターでさえ、散粉の不均一や粉のつまりに苦しんでいたものが、今や100mのパイプを用いても略々満足すべき状態に散粉されるようになった。これによれば、1時間に実に20hr内外の散布を行なうことができる。

こうして見ると、除草剤も粉剤ないしは微小粒剤等のパイプダスターによる散布によって、さらに能率を向上させ得る道があるのではないだろうか。